〔火明饒速日の**日本国**〕　　二五〇年代前半～二九八年

『日本書紀』、「大己貴命と、少彦名命（本書では謀反した天火明、二代垂仁）、力をあわせ心を一にして、天下を経営す。・・其の後に、少彦名命、行きて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷（常陸）に至りましきという」、

「自後、国の中に未だ成らざる所をば、大己貴神、独能く巡り造る。遂に出雲に到りて、・・言わく、『今此の国をおさむるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下をおさむべき者、蓋し有りや』とのたまう。・・時に、神（あや）しき光海に照らして、浮び来る者あり。曰わく、『もし吾〔本書では火瓊瓊杵の児火照、海幸彦、天火明を襲名する火明、火明饒速日（三代垂仁）〕在らずば、汝何ぞ能くこの国を平（む）けましむや。吾が在るに因（よ）りて故に、汝その大きに造る績（いたわり）を建つこと得たり』という。大己貴神問いて曰はく、『然らば汝は是誰ぞ。・・今何処にか住まむと欲う』とのたまう。対えて曰わく、『吾は日本（やまと）国の三諸（みもろ）山に住まむと欲（おも）う』という。これ、大三輪の神なり」

『但馬故事記』、「（火明）饒速日は勅と瑞宝十種を奉じて妃の天道姫・数多の随身を率い、丹波の真名井原（籠神社奥宮の地）に天降った。そこで豊受姫からもらった五穀や桑の種を植えつけたり、井戸を掘ったり、田畑を開いて蚕を育てたりした。

豊受姫はこれを見て大いに喜び、田つくりの手伝いにと天熊人を遣わした。後に、饒速日はそこから河内生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、その児を天村雲という

〔**籠**（この）**神社**〕（京都府宮津市）、本宮に主祭神の彦火明命、相殿に豊受大神・天照大神・海神・天水分神を祀る。同時に、日本最古の海部氏系図（国宝）を伝える。眞名井原に鎮座する奥宮（眞名井神社）は神代の鎮座地とされ、豊受大神と天照（皇）大神を祀ってきた。垂仁天皇の御世、眞

名井原の匏宮（与佐宮、与謝宮）に鎮座する天照（皇）大神が伊勢国五十鈴の川上（内宮の地）に遷座したという。雄略期になると、眞名井神社の豊受大神が伊勢山田原の豊受大神宮（外宮）に勧請された経緯から、元伊勢と呼ばれてきた。

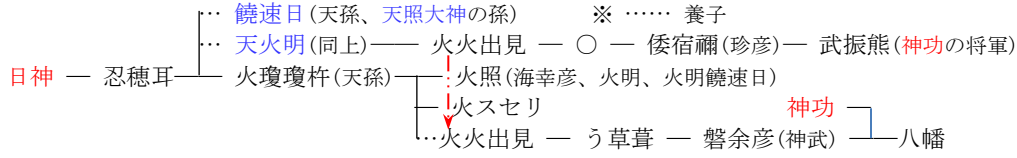
海部氏系図 本系図 始祖彦火明（天火明）―〇―〇―三世孫倭宿禰（珍彦）―武振熊（神功将軍）

同　　勘注系図 始祖彦火明（火明饒速日）―天香語山―天村雲―天忍人（倭宿禰）―

☆本書では、本系図の彦火明→天照大神の孫天火明　勘注系図の彦火明→火瓊瓊杵の児火明

☆この海部氏系図は、戦前には問題視されて門外不出とされてきた。だが戦後にその価値が見直されて国宝に指定された。これには、理由がある。この海部氏系図から、磐余彦（神武）と神功が共に三世紀後半に生きた人物で、かつ八幡（応神）が二人の児と判明するからだ。

☆一般的に八幡信仰は宇佐神宮（宇佐市）が最古とされるが、磐余彦が祖父の火火出見を祀り始めた鹿児島神宮も、「当宮の石体宮こそ、八幡信仰の発祥地」と主張して一歩も譲らない。その石体宮は、磐余彦が東征計画を練った所とされ、彼にちなむ巨石を御神体として祀る。同時に、お産の神様としても有名だ。それは、神功が石体宮で八幡を産んだからとされる。『水鏡』も『今昔物語集』も、一一三二年の大宰府文書も、神功がここで八幡を産むことや、石体宮の巨石に八幡の文字が刻まれていた由を伝える。さらに『今昔物語集』には、八幡神は大隅国に現れ、次に宇佐に遷り、最後に石清水に垂迹した由が記されているそうな。



はっきり言うと、神功は仲哀の皇后から磐余彦妃に乗り替えたわけだ。

〔**磐船神社**〕（大阪府交野市）、市内南部を流れる天野川渓谷沿いに鎮座して、饒速日命を祀ってきた。天磐船（高さ一二㍍、長さ一二㍍の船形巨岩）を御神体とする饒速日命降臨の聖地とされる。巨岩の前に小さな拝殿、上流に社務所があるのみで、本殿は存在しない。

〔**鳥見白庭山**〕、生駒市と奈良市にまたがる山。磐船神社から南三㌔㍍に広がる白庭台辺りは、饒速日命が天磐船に乗って哮峰に天降った後、移り住んだ鳥見白庭山であると伝わる。

「神武紀」、「（火明）饒速日命、天磐船に乗りて、太虚を翔行きて、是の郷を睨りて天降りたまうに及至（いた）りて、故、因りて目（なづ）けて、『虚空（そら）見つ日本（やまと）の国』と曰う」

『旧唐書』「倭国日本伝」、「日本国は倭国の別種なり」、「日本は旧小国、倭国の地を併せたり」

「垂仁紀」、「意富加羅国の王の子、名は都怒我阿羅斯等、伝（つて）に日本（やまと）国に聖皇有すと聞りて、帰化く。

〔**大神**（おおみわ）**神社**〕（桜井市）、大和国一の宮。祭神は、大物主大神。配神は、大己貴神、少彦名神。秀麗な三輪山を信仰の対象とした最古級の神社であり、拝殿と三輪山との間に三輪鳥居があるのみで、神殿を有しない。神紋は三つ巴、三杉。

〔**奥津磐座・中津磐座・辺津磐座**〕、神社から三輪山に登る山道脇には三群から成る磐座が点在していて、山頂に近い順に奥津磐座・中津磐座・辺津磐座と呼ばれ、それぞれ大神神社祭神の大物主大神（本書では三輪大物主、倭大物主、大神大物主、日本大物主大神）、大穴持・大己貴、少彦名を祀ってきた。

〔神功皇后の三韓征伐〕　　二八六年

「神功紀」、「(九年) 冬十月、和珥津（対馬上県郡鰐浦）より発ちたまう。・・即ち新羅に至る。時に新羅の王、是(ここ)に戦戦(おじわなな)瑟瑟(せむすべなし)きて厝身無所。則ち諸人を集えて曰わく、『吾聞く、東に神国有り。日本(やまと)という。また聖王(ひじりのきみ)あり。天皇という。必ずその国の神兵(みいくさ)ならむ。あに兵(いくさ)を挙げて距(ふせ)ぐべきや』と言いて、素旆(しろはた)をあげて自ら服いぬ」、「ここに新羅の王、・・金(こがね)・銀(しろがね)・彩色、及び綾・羅・縑絹をもたらして、八十艘の船に載れて、官軍に従わしむ。ここを以て、新羅の王、常に八十船の調を以て日本国に貢る、其れ是の縁なり」

「是(ここ)に、高麗(くり)・百済、二の国の王、新羅の、図籍(しろしえふみた)を収(とりおさ)めて日本(やまと)国に降りぬと聞きて、密に其の軍勢を伺(うかが)わしむ。則ちえ勝つまじきことを知りて、自ら営(いおり)の外に来て、叩頭(の)みてもうして曰さく、『今より以後は、永く西蕃と称いつつ、朝貢絶たじ』ともうす」

「神功紀」、「(九年) 十二月に、誉田天皇（応神天皇）を筑紫（の宇美）に生れたまう」

「応神紀」、「太子（応神）は竹内宿禰と共に敦賀の気比大神を参拝して、互いの名を取り替えた。太子は誉田別尊となり、大神は去来紗別神となった。しからば、太子の元の名は去来紗別尊だったことになるが、詳しいことはわからない」

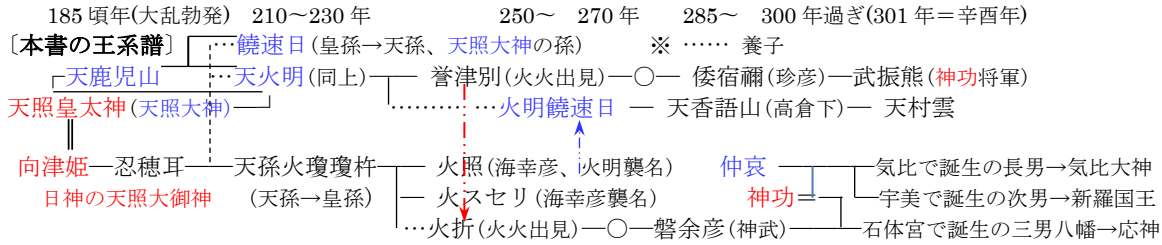
『先代旧事本紀』尾張氏系譜　饒速日命亦名天火明命―児天香語山命―孫天村雲命―天忍人

同書は、天香語山が天照大神のひ孫にあたる饒速日と天道姫の児、高倉下とする。

同国造本紀、「珍彦は火火出見の孫で、神武朝に導士の功によって大倭国造となった」

【籠神社の伝承】、「海部宮司家四代目の祖・珍彦は、建国の功労者として倭宿禰の称号を賜った」

「神武紀」、「天皇、(珍彦に対して、) 功を定め賞を行いたまう。倭の国造とす」



〔**神武**（磐余彦）**東征**〕　　二八五年～二九八年

「神武紀」、「神日本磐余彦天皇、諸の兄及び子等に謂りて曰わく、『塩土老翁に聞きき。『東に美き地あり。青山四周れり。其の中に天磐船に乗りて飛び来る者有り』と。・・余謂うに、彼の地は、必ず以て大業をひらきのべて、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。その飛び降るという者は、是饒速日と謂うか。何ぞ就きて都つくらざらむ』とのたまう」

「神武紀」、「皇師遂に長スネ彦を撃つ。連に戦いて取勝つこと能わず。時に忽然にして天陰けて雨氷ふる。乃ち金色の霊しき鵄ありて、飛び来りて皇弓の弭に止れり。その鵄光り曄煜きて、状流電の如し。是によりて、長スネ彦が軍卒、皆迷い眩えて、復力め戦わず」、「時に長スネ彦、乃ち行人を遣して、天皇に言して曰さく、『嘗、天神の子有しまして、天磐船に乗りて天より降り止でませり。櫛玉饒速日命と曰す。吾が妹三炊屋媛を娶りて、遂に児息有り。名をば可美真手命と曰す。故、吾、饒速日命を以て、君として奉えまつる。夫れ

天神の子、豈両種有さむや。奈何ぞ天神の子と称りて、人の地を奪わむ・・』ともうす。

天皇の曰わく、『・・汝が君とする所、是実に天神の子ならば、必ず表物有らむ。相示せよ』とのたまう。長スネ彦、即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩靫を取りて、天皇に示せ奉る。天皇、覧して曰わく、『事不虚なり』とのたまいて、還りて所御の天羽羽矢一隻及び歩靫を長スネ彦に賜示う。長スネ彦、其の天表を見て、益おそれかしこまることを懐く」

「神武記」、「ここに邇藝（饒）速日命参赴きて、天つ神の御子（磐余彦）に白ししく、『天つ神の御子天降りましつと聞けり。故、追いて参降り来つ』ともおして、すなわち天津瑞を献りて仕え奉りき。・・故、かく荒ぶる神等を言向け平和し、伏わぬ人等を退けはらいて、畝傍の橿原に坐しまして、天の下治らしめしき」

☆ここに、火明饒速日（物部氏の祖）率いる日本朝は瓦解して、大和朝廷に組み込まれた。

〔**神武天皇聖跡調査報告**（編集：文部省／一九四二年）〕、「神武天皇聖跡、鵄の邑は、奈良県生駒郡（生駒市）にあって、その地域は北倭村および富雄村にわたる地方と思われる。『日本書紀』によれば、鵄の邑は、もと邑の名を長髄と言い、・・神武天皇が長髄彦を討伐したところである。即ちこの地方は、皇軍が凶族の首長長髄彦を撃破した古戦場と言わなければならない。

その折、皇軍が鵄の瑞兆を得たことにちなんで、長髄邑の名をあらためて鵄の邑と名付けたが、後にそれが訛って鳥見と言うようになったとある。・・その地は大和の国に位置して、・・生駒川流域の地域と接している。・・」

〔**橿原神宮**〕（奈良県橿原市）、祭神は神武天皇、皇后媛蹈鞴五十鈴媛命。明治二十三年、明治天皇により橿原宮跡に建立された。